

日本語指導が必要な高校生用社会科副教材の開発から

—教科教育専門家・日本語教育専門家による協働実践—

武一美（認定NPO法人多文化共生教育ネットワークかながわ）・細井和代（元神田外語大学留学生別科）・青柳方子（元日本語学校）・尾崎則子（元佐野市立葛生中学校）

1. 社会科(歴史)副教材開発の背景

本副教材は、日本語教師3人（青柳・武・細井）、社会科教師1人（尾崎）の計4人で開発した。日本語教師3人は次のような背景を持つ。青柳は日本語教師として日本語学校や都内の中学、高校で日本語を教えた経験があり、現在は中学生の日本語ボランティアをしている。武は、大学の留学生に日本語を教える一方で、神奈川県の高校で多文化教育コーディネーターをしている。細井は大学の留学生に日本語を教えていた。尾崎は中学校の社会科教師として38年間勤務した。

現場での指導の中で青柳は、日本語の初期指導で基礎ができたとしても教科学習につなげることは容易ではないと感じていた。武は、高校生への教科指導は各担当者の個人的な努力に委ねられており共有や蓄積が難しいことが気になっていた。教科の副教材の開発は、このような問題を解決する糸口になると考えた。特に日本史は、日本語指導が必要な生徒たちが難しく感じているという声があった。そこで、日本史の副教材があれば、教科内容の理解の一助になるのではないかと考えた。2010年から2年ほど日本語教師3人で教材開発を進めていたが、2013年からは中学校で長年社会科を教えてきた尾崎が加わった。

2. 本副教材の概要

教材開発の方針を次の6点とした。(1)「中学校の歴史教科書」をわかりやすく伝えるための補助教材とする。(2)日本語指導が必要な生徒にとっても易しく読めるような工夫をする。(3)イラストを配することにより、日本の歴史に興味を持てるようにする。(4)内容は情報量を最小限にし、見開き2ページの字数を400字～600字に限定する。(5)日本語指導が必要な生徒が読みやすいように漢字には全てふりがなをつける。(6)翻訳文(中国語・英語)を併記して内容を理解しやすくする。

作業の手順としては、まず社会科教師が「中学校の歴史教科書」をもとにした説明文を作成し、日本語教師3人が、日本語指導が必要な生徒にとって、その文章が読みやすい表現になっているかどうかを検討した。さらに全員で繰り返し読み合わせをして推敲するという方法をとった。

3. 教科教育専門家と日本語教育専門家の協働作業

3.1. 教科教育専門家の視点

本教材の作成に際し、社会科教師は次のような考えを示した。(1)歴史には様々な解釈があるが、基本的な歴史を学ぶためには「中学校の歴史教科書」が資料として最適である。(2)「中学校の歴史教科書」にある基本的な歴史の知識は、生徒たちが現代の様々な社会問題を考える上で力になる。また外国籍の生徒が日本と自分の国との関係を考える上でも役に立つものである。(3)日本語指導が必要な生徒にとっては教科書の記述は内容があまりに多く難解な表現も多いので、副教材の内容は教科書の5分の1程度の情報量に精選する。「教科書のあらすじをつくる」というスタンスで作業する。細かな歴史用語にこだわるよりも歴史の流れを把握させたい。(4)イラストは手描きの人物画を中心にして歴史が人間の生活の連続であることをイメージさせたい。

3.2. 日本語教育専門家の視点

説明文の検討に際し、日本語教師は、「対象生徒たちが日本史を知ることには焦点を当てるため、その他のことではつまづかないよう、説明文は、多少不自然でもできるだけ簡単な表現にする」という基本方針を定めた。そのために次の3点に留意した。(1)使用語彙はできるだけ『進学を目指す人のための教科につなげる学習語彙 6000 語日中対訳』(中学・高校生の日本語支援を考える会、2011)の中にあるものとする。(2)複合語・使役・受け身表現は極力使用しない。(3)長すぎる連体修飾は避け、文の長さは60字以内にする。具体的には、「煮炊き」のような語は「料理」とし、「生き抜きました」は「生きました」に、「切り離されて」は「分かれて」に、「伝えられました」は「伝えました」に、というように言い換えた。

4. 中学・高校における本副教材の活用

2016年に副教材の第1部(旧石器～安土桃山)が、2018年に第2部(江戸～昭和)が完成し希望者に配布した。2019年には、本副教材の使用を希望する神奈川県の高校6校、都内の中学校1校に、第1部、第2部を配布した。教師の使用実態を知るため、2020年2月にアンケートを実施した。現段階で、高校は6校中4校、5人の教師から回答が得られた。該当校では、日本史授業(取り出し、週2時間)で活用された。使い方は様々であるが、「生徒が日本の歴史に興味関心を持つのに役に立ったか」という項目に、5人中3人が「とても役に立った」、2人が「まあまあ役に立った」と回答した。

中学校の国際教室では、個別指導の形で活用された。アンケートの自由記述欄に書かれた内容を紹介する。

日本語ができない中国人生徒に使用した。日本の歴史に興味を持たず、授業中もずっと寝ているという話だったので、まず、最初からページを飛ばしながら要点を日本語で言い、それにあたる文を読ませ、概略が分かったところで、テスト範囲の内容の中国語文を読ませ、次に日本文を読ませて内容に対応させた。用語の意味がわかったので、在籍校の授業で使うワークシートに単語を記入することができた。中学生に使うなら、イラストよりも資料となる図説や文化財などの写真、地図などを載せてもらいたい。また歴史用語の母語による意味もあればいいと思う。年表には日本の時代の他、中国や世界の主な出来事も盛り込んでもらおうと使いやすい。(原文のまま)

5. まとめと今後の展望

今回、日本語教師と社会科教師の協働によって、日本語指導が必要な生徒のための副教材の開発を行った。開発プロセスにおいては、社会科教師と日本語教師のそれぞれの経験をもとにした具体的で建設的な意見が交換された。この作業は参加した教師たちにとっても視野を広げる良い機会となった。出来上がった副教材が複数の現場で活用され、母数の少ないアンケート調査ではあるが、本副教材が日本史取り出し授業や国際教室での指導の一助になっていることが確認できた。一方で、本教材に対する様々な改善点の提案や要望も寄せられている。こうした現場からのフィードバックを受け、我々教材開発者が現在の教材を改良したり新たな教材を開発したりするという往還にも協働が存在すると考える。そのような、さらなる協働のために、本副教材を4月からホームページで公開する。より多くの現場での活用が可能になるように、スペイン語・韓国語・タイ語訳版と活用例も追加し、自由にダウンロードできるようにした。外国人材受け入れのための制度が新たに作られ、実質上の移民元年とも言われる今、大人と共に移動する子どもたちを公教育の中でいかに育てていくのか、協働の輪を広げながら考え行動していきたい。